

Lydian メールマガジン37テクニックより大事なもの

12/1がメルマガ発行予定日だったのですが、質の悪い風邪を引いてしまい、書く気力が起きませんでした。今回はショートバージョンでご勘弁を、ということでジャズを聴く上でミュージシャンのテクニックをどう捉えるかという点について簡潔に書いてみたいと思います。

まず個人的な体験から。自分がアドリブのある音楽（ロック）を聴き始めたのは中学生時代ですが、当然その頃は耳が育っていなかったもので、エリック・クラプトンのギターソロを聴いて「すげーテクニックだな～」と感動していました。音数の多さが凄いことだと単純に思っていた感じですね。

その後ジャズを聴き始めるわけですが、依然としてハーモニーや使われている音を聴き分けて楽しむというより、コルトレーンが細かく速い音符で延々とソロを取る（シーツ・オブ・サウンドと呼ばれてましたね）を聴いてカッコイイと思っていました。当時は熱に浮かされたように猫も杓子もコルトレーンを礼賛していましたから、そうした批評にも影響されていたと思います。

そういう聴き方が悪いと言っているわけではありません。特にライブの場合、目の前でミュージシャンの指がスゴイスピードで動いて音になるのを見て感じるだけで、どの音かを聴く以前に、テクニックに感心し、興奮するというのは当然ありえると思います。言い方を変えれば、音の洪水に身を任せるといえるのはある種の気持ち良さを伴う面もあります。

ただ、ジャズのアドリブにはもっと別の楽しみ方もあることも知っていただきたいと思います。それは「メロディとしてのアドリブをきちんと聴く」ということです。アドリブはコード進行に基づいて即興でフレーズ（音列）を作る作業ですが、ある音列はとてもメロディアスに聴こえ、ある音列はつまらなく聴こえるということがあります。

一例を上げてみましょう。管楽器が入った演奏などでは何人ものミュージシャンが順番にアドリブを繰り広げますが、それぞれ使う音が違っていて受ける印象がかなり違います。それを聴き分けられるようになると、ジャズがグッと楽しくなると思います。ソニー・クラークの有名なアルバム「Cool Struttin'」の1曲目に収録されている「Sippin' At Bells」というチャーリー・パーカー作が作ったブルースを聴いてください。
<https://www.youtube.com/watch?v=VpAtX3CEINo>

リーダーのソニー・クラーク(p)→ジャッキー・マクリーン(as)→アート・ファーマー(tp)の順番でアドリブを取って行きますが、音の使い方はかなり違うのが分かります。44秒付近から始まるクラークは、ブルーノートも多用してブルースのコード感を強く打ち出したアドリブを展開します。2分19秒辺りから始まるマクリーンのアドリブも、管楽器ならではの長い音符を使っていますが、印象としてはクラークと比較的似ています。

ところが、4分10秒辺りから始まるファーマーのアドリブから受ける印象はかなり違います。ブルースのコード進行の特徴をあまり感じさせず、ブルーノートもモロにブルースフィーリングを感じさせる使い方はしません。半音移動を多用するので、フレーズから受けるコード感は比較的希薄になり、浮遊感も一部感じます。

この3人はいずれも同時代の黒人ミュージシャンですが、使っている音はかなり違うので、当然聴き手が受ける印象もかなり異なります。ファーマーは、クラークが多用している分かりやすいブルース的音使いではなく、より洗練された方向が好きなのだと思います。自分はクラークやマクリーンの方がメロディアスに感じられて好きですが、当然ファーマーが好みだという方もいらっしゃると思います。

一朝一夕には難しいかもしれませんが、こうした意識でメロディとしてのアドリブを聴いていくと、ミュージシャンによって実に様々な音の組み立て方があり、それが自分にとって良いメロディとして聴こえる場合と、そうでない場合があることも感じられるようになります。

Lydian メールマガジン37テクニックより大事なもの

優れたミュージシャンは、自分の頭の中で直前に鳴った音を使ってアドリブを取りますが、ファーマーも頭の中で鳴った「自分の好みの」メロディを吹いていると思われま。それが自分にとってそれほど感じる場所がないとすれば、自分の好みのメロディとファーマー好みのメロディが違、つまり聴き手とミュージシャンの相性がよくないということなのでしょう。

ここでテクニック、特に音数多く速く弾ける能力（指が動くという言い方をします）というテーマに戻ると、テクニックは良いアドリブを演奏するための必要条件の一つではありません。極端なことを言えば、あるコードで使えるスケールや分散和音をもものすごいスピードで上がったり下がったりしても、音楽には成りえません。プロでもたまにこういう用意したようなスケールを演奏するミュージシャンがいますが、自分は好きではありません。

確かに、指が速く動かなくては演奏できない種類のカッコイイフレーズもあります。それは、そのフレーズを演奏するという音楽的必然があって、そのためにテクニックを使っているとすれば正しい方向だと思います。テクニックが音楽的価値を高めるために、いわば奉仕しているわけです。

もう一つはメリハリです。そうした音楽的に意味があるフレーズでも、延々と休みなくたくさんの音を聴かされると、自分の場合は耳が音を追い切れず集中が切れてしまいます。聴き取れる良いメロディを基本としながら、時折ハッとするような速くてカッコイイフレーズを繰り出すというアドリブの方がずっと好きです。

こういう意識を持ってジャズを聴いていると、同じように高いテクニックを持っていても、素晴らしくメロディアスなフレーズを紡いで行くアドリブと、単なる音の羅列に近いアドリブがあることも分かって来て、ますますジャズが楽しく聴けるようになると思います。